

第16章第一次大戦と大戦後のヨーロッパ

3. ヴェルサイユ体制下の欧米 a. ヴェルサイユ体制の成立

①1919 1月 [1]]講和会議の開催 27ヶ国参加

基本

- 5ヶ国(英, 米, 仏, 日, 伊)を中心とした運営
- 英・仏のドイツに対する[2]]
- [3]]への警戒感 会議への参加を拒否
- 米大統領[4]]の[5]]カ条の平和原則
- とくに[6]]の原則

②1919, 6, 28[7]]条約(対ドイツ), [8]]条約(対オーストリア)
 トリアノン条約(対ハンガリー), セーヴル条約(対[9]]), ヌイイ条約(対ブルガリア)を押し付ける

③内容

- 1) ドイツは多くの領土を割譲, 全ての植民地を放棄する
- 2) 軍備の制限
- 3) 海軍の軍備制限, 潜水艦・航空機の所持禁止など
- 4) [10]] (ライン川西岸) の非武装化
- 5) 「天文学的数字」に及ぶ巨額の賠償金支払い

④ヴェルサイユ体制

1) [11]] 帝国の解体
 →オーストリアはヨーロッパの小国に

2) 新興独立国の成立

→「[12]]への防波堤」の役割を期待

[13]],
 チェコスロヴァキア,
 ハンガリー,
 フィンランド,
 バルト三国 (ラトヴィア・エストニア・リトアニア)



[14]]の成立 (セルビア+モンテネグロ+旧オーストリア領)

3) 中東地域…アラビアの独立
 分割 [15]]…[16]]・[17]]・トランス=ヨルダン
 フランス…[18]] (・レバノン)

4) ドイツに対する極度の圧迫=連合軍への激しい反発, 経済困難→ヒトラー出現の背景

5) ソ連とヨーロッパ諸国との関係の不安定

6) 諸民族の期待と失望→民族運動の高まり (朝鮮=3. 1独立運動, 中国=5. 4運動など)

7) アメリカ=「世界の債権国」として世界に経済援助 → 資本主義諸国の中心

[19]]の台頭→大戦中に勢力圏・経済力を拡大

[20]]諸国の弱体化=「債務国」としてアメリカの経済力に依存

⑤国際連盟の設立 = 集团的平和維持をめざす (本部[21]])

ア) [22]]の不参加

イ) [23]], [24]]の参加を認めない

1926年加盟 1934加盟

ウ) 英・仏による自国中心の運営, 軍事力の裏付けを欠く

b, ワシントン会議と国際協調の高まり

①大戦後の外交=[25]]主導型へ ア) 巨大な経済力, イ) [26]]主義外交

②[27]]会議(1921~22) 米大統領[28]]主宰

1) 9ヶ国条約…[29]]の門戸開放の実現, 主権の尊重
 →日本=「石井=ラッパ」協定(1917)を破棄, [30]]省の利権を返却

2) 4ヶ国条約 = [31]]の和平維持, 領土の現状維持→[32]]同盟解消

3) [33]]条約=海軍主力艦の保有率決定→補助艦 で

③1925 [34]]条約…ドイツ西部国境の現状維持, ドイツの国際政治復活を承認
 →1926 ドイツは国際連盟に加盟

④1928[35]]条約締結…戦争自体が違法行為と考える
 ブリアン(仏)とケロッグ(米)の提唱

⑤1930ロンドン軍縮条約…補助艦の保有比率を決定(1927ジュネーヴ軍縮条約は失敗)